

地域社会学会ジャーナル

No. 10

(2023. 4. 22)

2022 年度第 4 回研究例会号

地域社会学会ジャーナル発行委員会

地域社会学会事務局

Office of Japan Association of Regional and Community Studies

〒480-1198 長久手市茨ヶ廻間 1522-3 愛知県立大学教育福祉学部

松宮 朝研究室内

TEL 0561-76-8706 (直) FAX 0561-64-1107 郵便振替 地域社会学会 00150-2-790728

E-mail jarcs.office@gmail.com URL <http://jarcs.sakura.ne.jp/>

目 次

地域社会学会 2022 年度第 4 回研究例会報告プログラム	…… 3
--------------------------------	------

報告論文

創発／節合の機制

—〈コモン〉を再考する—

吉原 直樹……4

批評論文

反--理論、非--対象から問いなおすということ

仙波 希望……11

「モビリティ論」をいかに学ぶか、いかに活かすか

藤本 延啓……15

Regional and Community Studies beyond Borders

Sustainability and City-Regions の研究動向紹介

鈴木 鉄忠……24

地域社会学会 2022 年度第 4 回研究例会

報告プログラム

日 時	2023 年 2 月 18 日（土）14 時～17 時
開催方法	立教大学＋ZOOM によるハイブリッド開催
司 会	清水 洋行（千葉大学） 小山 弘美（関東学院大学）
報 告	吉原 直樹（東北大学名誉教授） 移動論的転回と地域社会学の「あいだ」 ーモビリティーズ・スタディーズの底流
報 告	福田 友子（千葉大学） 南アジア系移民企業家の地域拠点形成 : 千葉県内の中古車・中古車部品貿易業者を中心に

創発／節合の機制 —〈コモン〉を再考する—

吉原 直樹

はじめに

本報告は、本学会研究委員会からの要請に応じて、地域社会学にとって移動論的転回（mobilities turn）のもつ意義について、モビリティーズの射程とその基底をなす「複雑性」思考、創発や節合などの概念に言及しながら考察するものである。とはいえ、以下の報告の大半は、既刊もしくは近刊の拙著や拙稿において発表したものと重複している（吉原 2008;2018;2022a;2022b; 2023;近刊）。最初にこの点をお断りしておきたい。

まず、移動論的転回の序曲をなす（あるいは移動論的転回がその一部をなす）空間論的転回（spatial turn）から概観することにする。

1 社会理論における空間論的転回の位相

1970 年前後に、社会理論領域において空間論的ルネサンスという状況が出現した。その水源をなしたのは、1950 年代から 60 年代において地理学界を席捲した実証主義的地理学＝「空間科学としての地理学」にたいする批判として 1970 年代に入って立ちあらわれた人文主義地理学であった。それによって、長い間、等閑視されてきた人間にとって場所のもつ意味が探求されるようになった。そしてその動きが、アンリ・ルフェーヴルの『空間の生産』の英語版の刊行（Lefebvre 1974=2000）が一つの促迫要因となって、アンソニー・ギデンズ、ディヴィッド・ハーヴェイ、エドワード・ソジャ、マニエル・カステルなどのいわゆる批判派と称される社会学者や地理学者を巻き込みながら空間論的ルネサンスへと発展していった。空間論的転回はこの空間論的ルネサンスの只中から立ちあらわれたが、それは後にカルチュラル・スタディーズへと発展していった文化論的転回(cultural turn)と共振していた。そして文化論的転回の初発の契機となったモダニティの再審、とりわけ近代の知を枠づけてきた空間／場所と時間をとらえ返すことが共通の出発点になっていた。まさに、社会理論の根幹にかかわるものとして出自したのである。

空間論的転回がより深化するようになるのは、1990 年代から 2000 年代に入る時点においてであり、モダニティの両義性に準ずる空間／場所と時間の再審から、グローバル化の進展にともなう、社会の脱領域化／脱場所化の動きへと視点変更することになった。そし

て国民国家のゆらぎとともに、「一つのまとまりのあるもの」、すなわち「境界のあるもの」、「仕切りのあるもの」が問い直され、空間／場所を分かつとされてきた「境界」＝「あいだ」のありように照準を合わせるようになった。それは空間をすでにあるものとする「空間フェティシズム」およびそれと一体としてある線形的理論から離床し、「断片的で混沌とした変化のさまざまな流れ」（Harvey 1990=2022:93）のなかにある「生きられた空間」、「循環する時間」に目を向けるというものであった。そこでは、「表象の危機」に根ざす文化論的転回を継受するとともに、ルフェーヴルの身体論的空間が基調音となった。同時に「複雑性」思考を宿すようになった。

2 空間論的転回から移動論的転回へ

2000年代に突入して、グローバル化がより多次元的なものであるという認識が深まるとともに、社会の脱領域化／脱場所化とともに再領域化／再場所化が取沙汰されるようになる。こうして移動論的転回が空間論的転回の道筋において立ちあらわれた。そこでは非線形的理論へのいっそうの傾斜と「複雑性」思考がより鮮明になった。ちなみに、移動論的転回を主導的に担ってきたジョン・アーリは、「複雑性への転回（complexity turn）」の内容を、以下の7点、すなわち[1]状況によって変わる秩序形成の内実、[2]階層的な組織化形態からネットワーク型の組織化形態への転換がもたらす意味、[3]ネットワークのきわめて不安定な自己再生産の性質、[4]ミクロな現象がグローバルな次元で「個の総和」以上のものとして立ちあらわれる状況、[5]社会諸関係とモノからなるシステムが複数のものが組み合わさった状態で存在すること、[6]予測不可能でまったくコントロールできない、予期せぬ不均衡をともなうモノとコトの生産のありよう、そして[7]以上とともに立ちあらわれる人間関係、家庭、社会におけるさまざまな「非線形的変化」とそれらの「あいだ」で生じる「分岐点／転換点（tipping point）」の性質、においてとらえている（Urry2007=2015:46-47）。

アーリがいうように、この「複雑性への転回」によって「ア・モバイルの社会科学」から「モバイルの社会科学」への＜飛びこえ＞が可能になったかどうかは、ここでは問わない。むしろここで注目したいのは、先に言及した「境界」＝「あいだ」が、あらためてきわめて重要な含意をふくんで立ちあらわれていることである。それは一つには、「境界」＝「あいだ」が抱合する「転換」の性格、そしていま一つには、それとともに立ちあらわれる空間的な広がり¹⁾と関連がある。まず前者についていうと、ここでいう「転換」は、基本的にはグローバル化の変容に帯同するものであるが、それはあるフェイズから別のフェイズへの「通過点」というよりは、二つのフェイズが相互浸透する相をあらわしている。そしてそれじたい、非線形的な機制および複雑性の定理で示されるものと響き合っている。

まさに上記のティッピング・ポイントとしてある。そこでは多様で、ばらばらで、不確実なもの、けっして完了したものではない形で寄り集まって、全体の織地が決まるのである。だからこそ、アーリをはじめとして移動論的転回を主導してきた論者たちが、諸形態・現象に^{フェティッシュ}盲従するモビリティーズのかたちよりも、むしろモビリティーズが内包する社会的諸関係のありようにこだわってきたのは、当然の理である。

もちろん、その社会的諸関係じたい、きわめてアモルフなものであり、容易に指標とか係数などで精緻化することはできない。平たくいうと、ここでは人と人が交わる根源のところであらわれる関連態／関係様式に目が向けられ、その傑出した形として「創発」の機制がとりあげられることになる。

3 「創発」／「節合」の機制

管見のかぎり、「創発 (emergence)」についてもっとも体系的に述べているのは、前掲のアーリである。彼の議論を約言すると、およそ次のようになる（吉原 2022a:167-168）。

（創発とは）あらゆる種類の現象にみられる「集合的な特性」のことである。それは、「おのれの構成要素を越えるような、振る舞いの規則性」をはらんでおり、しかもそれが「その部分のサイズよりも大きくなるというのではなく、その部分とは何かしら異なるシステム効果が存在する」という点に最大の特徴がある。つまり、「多数のものは少数のものとは違った振舞いをみせるがゆえに量の多なるのは質の異なり」になるということが重要なのである。この集合的特性を一つの指標として、「さまざまな種類のつながりが交互に並び合い、交わり合い、結び合う」という「創発」の基礎的過程が描きだされる。

ちなみに、河野哲也は、世界に存在する諸々のものが多元的かつ入れ子状をなして並び合うことにともなって「創発」が生じるという。そして「創発」の特性を、「下にあるもの」が「上にあるもの」にそのまま移る^{スライド}のでもなければ、「上にあるもの」が「下にあるものに」直接立ち帰るのでもない点にもとめている（河野 2008）。

ところでこうした「創発」の中核概念として特に注目されるのは、マヌエル・デランダのいう「アサンブラージュ」、ジェームズ・ギブソンらのいう「アフォーダンス」、さらにそれらと横並びとしてあるエルネスト・ラクラウとシャンタル・ムフのいう「節合 (articulation)」である。ここでは、紙幅の都合で、それぞれについて概略するにとどめる。

まず「アサンブラージュ」について、アーリは、ジル・ドゥルーズに依拠して次のように概括している（Eliot and Urry 2010=2016:18）。

[アサンブラージュは]関係し合う合成物であり……システムを構成する諸要素の属性やアイデンティティが融合しつねに変化し、時間と空間を通じて創発的なかたちで実現され、歴史的に特有のプロセスにおいて具体化される……。

次に、「アフォーダンス」について、ギブソンは概ね次のようにとらえている（Gibson 1979=1986。但し、ここでは吉原（2018:212）より引用）。

環境を所与のものととらえるのではなく、物と動物のありよう、つまり人間や動物が物に影響を与え、それがフィードバックすることによって動作や感情が生じるとみなす。

他方、最後の「節合」について、ラクラウとムフの議論（Laclau and Mouff 1985=2000）をまとめると、概ね次のようになる（吉原 2022:59-60）。

それ[節合]は、行為主体の、異主体との交わりを通して獲得された「当事者性」と、社会の側の変容に即して練り上げた「他者性」とのすりあわせの「かたち」／状態を示すものとしてある。つまり、「自由な越境」、畢竟、内に閉じていかないということの特徴とする……。「節合」は諸主体の多元的で相互的なつながりを、横に広がる接面（interface）で示すものであり、システムの維持を前提とする「統合」とも地域内部での完結性（autonomy）を与件とする「内発的発展」とも異なっている……。そうした節合に埋め込まれた複層性、そしてそこに深く足を下ろしている無秩序と不均衡こそ、「創発的なもの」にたいする磁場をなすものである。

こうしてみると、「アサンブラージュ」にしても「アフォーダンス」にしても、そして「節合」にしても、どうやら「創発」の起点をなすこと、そして前者から後者を通して、いわば平衡に向かうことも永続的なアナーキーに至ることもないゆえ、常に「動的な不安定性」をともなわざるを得ないことが指摘できる。ちなみに、前掲のデランダは、それをいつ壊れてもおかしくない「はかない集合体」と述べている（DeLanda 2006:52）。しかしここでより注目したいのは、にもかかわらず、それらが前述の「領域」＝「あいだ」がはらむダイナミクスとフレキシビリティを示していることである。詳述はさておき、そこでは何よりも、「共に^{ユ・プレゼンス}あること」（似田貝香門）が始原的に確認されるとともに、自発性や自律性にプライマシーを置かない、換言するなら、特権的主体を前提としない＜脱主体＞の考え方が見え隠れしている。実はこのことを踏まえた上であらためて注目されるのは、

指摘されるような「創発」／「節合」がハンア・アーレントのいう「網の目」と重なり合うことである。アーレントは、『人間の条件』のなかで、無数の行為が生じ、相互召喚し、連鎖していくところにおいてこの「網の目」が形成されるとしている（Arendt 1958=1994）²⁾。

4 パブリックからコモンへ

さて、以上の「創発」／「節合」の機制を、地域社会学、というよりは今日の地域とか地域社会のありようにかかわらせて言及するなら、主要な眼目になるのは、みてきたような「創発」／「節合」の始原となる〈共〉、すなわちコモンの「現在性」をどうみるかということになるだろう。この場合、コモンとは、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートの以下の言述にあるように、ある種のコモンズ（「共通の場」）につながる素地を形成する「共に—あること」であり、持つことではない（Negri and Hardt 2017=2022:150）。

【それは】所有にではなく、他者との、そして他者にかかれた相互作用に基礎を置いている。主体性は所有によってではなく存在によって、あるいはより適切には、共同存在、共同行為、共同創造によって定義されるのである。

ところでネグリとハートはこう述べて、「資本主義の発展の内的な動き」が「これまで以上に〈共〉^{コモン}に依存するようになっており、それに応じて生産物もますます〈共〉^{コモン}のかたちをとるようになっていく」（前掲書:378）と続ける。つまり上からのコモン・ゲイズにさらされているというのである。これはある意味できわめて適切な指摘である。

ちなみに、報告者は、東日本大震災直後の原発事故被災地の大熊町にあらわれたサロンにおいて、このコモンおよび上からのコモン・ゲイズを観取している。そこでは、（１）お茶会や趣味の集いや小さな祝祭などに参加する者たちが、行政主導の組織に一方的に動員されるのではなく、多様なアイデンティティを維持しながら、対面的な相互行為を繰り広げ、それを通して矛盾をはらみつつ他者とゆるやかにつながり、外部の世界と接点をもつことによって、具体的な他者の生への配慮にもとづく関係性ができあがり、それがあある種の集合性へと発展していったこと、同時に（２）そうしたサロンが絆補助金制度によって丸ごとからめとられてしまったこと、が明らかになっている（吉原 2021）。つまりサロンにおいて「創発」／「節合」の原構造であるコモンを見いだすことができるとともに、それが上からのコモン・ゲイズにからめとられていることがわかったのである。異風景ではあるが、隣の双葉町でも同じような動きがみられる。同町に立地している東日本大震災・原子力災害伝承館では、被災・復興空間を身体論的空間とみなし、被災者の五感にもとづく

コモンの記憶の掘り起こしに主軸を置いている。

視点をさらにコロナ禍の地域社会に向けると、たとえば、地区社会福祉協議会管轄の、あるいはその内外のサロンでは、パブリックからコモンへのシフト・チェンジが急速にすすんでおり、上からのコモン・ゲイズが地域社会のすみずみまでおよんでいるようにみえる。

むすびにかえて

上からのコモン・ゲイズの浸透によって、みてきたような「創発」／「節合」の機制がどうなるかは、いまのところ不明である。ひょっとしたら、デランダのいう「はかない集合体」が現実のものになるのかもしれない。前掲のネグリとハートは、（上からのコモン・ゲイズにたいして）「人びとが私的所有と公的所有の両方から＜^{コモン}共＞を守るために闘っている」と述べているが³⁾、だからこそ、いま一度、モビリティーズの非線形的な動態に立ち戻って、人びとが「語り合い」、「聞き合い」、「ふれ合い」を通して「相互に関係をもつ」ことが数えきれないほどの可能性と課題をもつことの意味を、本源的に問い直す必要があると思われる。

注

1) ここでいう空間的広がりはこのあとの叙述からも明らかなように、土地という素材的規定でとらえることのできない、マルク・オジェのいう「非—場所」と場所とが高度に互換／相補する「あいだ」を表象している（Augé 1994=2002）。

2) いわゆるアクター・ネットワーク理論（ANT）、すなわち『主体』の内外にあるさまざまなものがエージェントとして把握され、それらが組み合わさることで行為を行う『主体』ないし『アクター』が作られるという視点」（Latour 2005=2019:499）がみてきたような「創発」／「節合」の機制を浮かび上がらせることに与していることは、大いに注目される。

3) ちなみに、ネグリとハートは「大都市、地方の社会的領域——建設された環境であると同時に、確立された文化的回路でもある——は社会的相互作用と協働の成果であって、＜共＞的使用、管理運営へと開かれていなければならない」（前掲書:141-142）と述べている。

文献

Arendt, H., 1958, *The Human Condition*, University of Chicago Press. (=1994, 志水速雄 訳『人間の条件』ちくま学芸文庫)

Augé, M., 1994, *Pour une anthropologie des mondes contemporains*, Aubier. (=2002, 込

- 山工訳『同時代世界の人類学』藤原書店)
- DeLanda, M., 2006, *A New Philosophy of Society: Assemblage Theory and Social Complexity*, Bloomsbury Publishing. (=2015, 篠原雅武訳『社会の新たな哲学——集合体、潜在性、創発』人文書院)
- Elliott, A. and Urry, J., 2010, *Mobile Lives*, Routledge. (=2016, 遠藤英樹監訳『モバイル・ライヴズ』ミネルヴァ書房)
- Gibson, J. J., 1979, *The Ecological Approach to Visual Perception*, Houghton Mifflin. (=1986, 古崎敬訳『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社)
- Harvey, D., 1990, *The Condition of Postmodernity*, John Wiley & Sons. (=2022, 吉原直樹監訳『ポストモダニティの条件』ちくま学芸文庫)
- 河野哲也, 2008, 「アフォーダンス・創発性・下方因果」(河野哲也・染谷昌義・齋藤暢人編『環境のオントロジー』春秋社)
- Laclau, E. and Mouff, C., 1985, *Hegemony and Socialist Strategy towards a Radical Democratic Politics*, Verso. (=2000, 山崎カオル・石澤武訳『ポスト・マルクス主義と政治』大村書店)
- Latour, B., 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory*, Oxford University Press. (=2019, 伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局)
- Lefebvre, H., 1974, *La production de l'espace*, Anthropos. (=2000, 斎藤日出治訳『空間の生産』青木書店)
- Negri, A. and Hardt, M., 2017, *Assembly*, Oxford University Press. (=2022, 水嶋一憲ほか訳『アセンブリー——新たな民主主義の編成』岩波書店)
- Urry, J., 2007, *Mobilities*, Polity. (=2015, 吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ』作品社)
- 吉原直樹, 2008, 『モビリティと場所——21世紀都市空間の転回』東京大学出版会.
- _____, 2018, 『都市社会学——歴史・思想・コミュニティ』東京大学出版会.
- _____, 2021, 『震災復興の地域社会学』白水社.
- _____, 2022a, 『モビリティーズ・スタディーズ——体系的理解のために』ミネルヴァ書房.
- _____, 2022b, 「ポストコロナ時代の移動のゆくえ」『三田評論』2022年11月号.
- _____, 2023, 「モビリティーズ」友枝敏雄ほか編著『社会学の力 改訂版』有斐閣.
- _____, 近刊, 「モビリティーズと〈共〉の社会理論の可能性」遠藤薫ほか編著『災禍の時代の社会学』東京大学出版会.

反--理論、非--対象から問いなおすということ

仙波 希望

1.はじめに

本論は、2023年2月18日に立教大学池袋キャンパスでハイブリッド開催された地域社会学会2023年度第4回研究例会の成果を踏まえ、執筆されたものである。「移動論的転回」における領域性・移動性・複雑性の照射を全体の目的としながら、前半は吉原直樹会員による理論的報告、後半は福田友子会員による事例報告がなされ、双方に活発な議論が展開された。以下ではそれぞれの報告、それを受けての議論における概略・論点を提示し、そこへ筆者による若干の考察を添えてみたい。

2.第一報告について

2.1 報告概要と論点(1)

吉原直樹会員（以下、敬称略・氏で統一する）による第一報告「創発／節合の機制——<コモン>を再考する——」では、(1)地域社会学に対して「移動論的転回」のもつ意義の提示、(2)モビリティーズの射程とその基底をなす複雑性思考の概観、そして(3)「創発」や「節合」などの概念の理論的検討が主に行われた。

2000年代以降、ポストグローバル化が進展し、社会の再領域化／再場所化へと注目が集めるなか、『都市空間の社会理論』で吉原氏が指摘されたところのかつての「空間論ルネサンス」「空間論的転回」から(吉原 1994)、「移動論的転回」へと理論的移行が図られてきた。

ジョン・アーリ(2007=2015)の議論を敷衍すれば、この「移動論的転回」とは、旧来の人間中心主義(humanism)に対する批判、非一人間とされるアクターへの着目、そしてモビリティーズが内包する、指標・指数へと還元できない社会的諸関係のありかたに目を向けさせるものである。いわば土地や素材のみでは捉えることのできない、マルク・オジェの言うところの「非一場所」的関係様式の機制を探求するための視座が、「移動論的転回」となる。

こうした射程の先に吉原氏が着目する概念が「創発」と「節合」である。「創発」(「創発的なもの」とは、「諸主体間の交流としてある相互作用が新たな変化をもたらし、そうした変化が累積されることで人びとのつながりとか関係などが変わり、システムの構造が変わっていくプロセス」を指す(吉原 2011:359-360)。また、レイ・アルチュセールの議論をもとに、カルチュラル・スタディーズの第一人者であるスチュアート・ホールらによって練り上げられた「節合」の概念を、吉原氏は「行為主体の、異主体との交わりを通して獲得された「当事者性」と、社会の側の変容に即して練り上げた「他者性」とのすりあわせの「かたち」／状態を示すもの」と位置づけ、「諸主体の多元的で相互的なつながりを、横に広がる接面^{インターフェイス}において示すもの」であり、それ自体が「諸主体の「自由な越境」」を原動力としている、と論じる(吉原 2022:77)。この「節合」が、「創発的なもの」を生み出す圏域として提示されるのだ。

以上の概念、理論的枠組を地域社会学の視座へ接近させることで、吉原氏は「「創発」／「節合」の始原となる<共>、コモンの「現在性」をいかにみるか」が争点になるとする。平たくいえば、従来の社会学の「コモン」に関する議論が、現在でもなお有効かを問う必要性をここで指摘する。というのも具体的事例に即せば、東日本大震災後のとある仮

設住宅の自治会から立ち現れたサロンでは、具体的な他者の生への配慮にもとづく関係性ができあがり、それがあつた種の集合性——「創発するコミュニティ」——へ発展していく様子がみてとれた。けれども資本主義発展の内在的な動きが「コモン」に依存するようになることで、補助金制度の整備がむしろ、この集合性を丸ごと絡め取ってしまうような事態、つまり上からのコモン・ゲイズが地域社会のすみずみまでおよんでいる状況を確認できるという。

この状況を打破すべく、複数形としてのモビリティーズの非線形的な動態に立ち戻り、人びとが「語り合い」「聞き合い」「ふれ合い」を通して、「相互に関係をもつ」ことが数えきれないほどの可能性と課題をもつことの意味、その本源的な問い直しが地域社会学に求められていると吉原氏は議論を締めた。

2.2 フロアとの往還(1)

刺激的な理論的展望を描き出す本報告を受け、フロアとの活発な議論が行われた。「節合の概念をいま用いることによる歴史的規定性」のありか、そして「モビリティではなくモビリティーズである」とする複数形の意味するところなど、報告の詳細にわたって興味深い指摘がなされていたが、とりわけ本論が着目するのは、阪口毅会員による「移動論的転回における地域社会(学)」というフレームワークの現在的意義について」の質問、そして小山弘美会員の「個別の事例としての研究対象に終始してしまう傾向があるなかで、いかに理論そしてより広い領野へケーススタディを接続することができるか」といった質問である。前者に関しては「地域や地域社会を所与の「箱」とする空間的フェティシズムの棄却・超克」という論点が議論をつうじて提示され、まさに教条主義的な理論の構築ではなく、むしろその理論自体を「内波」し刷新させていく吉原氏の方法論的な含意が、応答から浮き上がってきたように感じる。後者の質問も前者と表裏のものであり、ここではマーソンの「中範囲の理論」よりさらに野心的な色彩を増しながら、「フレキシブルな概念的道具であると同時に、普遍的な志向性を有してはいない」、「移動論的転回」を経た上での理論的展望、いわば堅固な「領域・主体」をむしろ解体していくような理論装置への志向性が素描されたように見えた。

3. 第二報告について

3.1 報告概要と論点(2)

福田友子会員（以下、氏で統一する）による第二報告「南アジア系移民企業家の地域拠点形成：千葉県内の中古車・中古部品貿易業者を中心に」では、自身のフィールドとされている千葉・印旛地域に集住するアフガニスタン人コミュニティ、山武のスリランカ人コミュニティについて話題提供がなされた。1990年代におけるニューカマーの外国人(移民)にみる「定住」という問題設定の困難さへの意識、そして2000年代以降の「トランスナショナルリズム論」の導入により、こうした課題がある程度解決する上でなお「なぜ、移民は、地域に集住／分散するのか」「どのようにして、移民は、地域に拠点を形成するのか」といった問いのもと、千葉県内の南アジア系移民企業家および中古車・中古部品貿易業の現在に関する、興味の尽きない事例が詳細に語られた。

移民起業家が多い中古車・中古部品貿易業界では、日本・千葉の印旛地域がグローバル市場としての供給地・輸出拠点として機能してきた。なぜこの地域がその役割を果たし、地域移動がどのようにして生じたのか、といった側面が統計データおよび歴史的背景から詳らかにされる。

とりわけ本論の目を引いたのはその業界特性ゆえ、福田氏のいうところの「間接移民システム」による、「輸出入におけるトランスナショナルな拠点形成」である。出身国、中継国、第三国と、アクターの母国の状況などによってその所属国の役割が変動し、また複数の拠点到家族・友人知人を配置し、それぞれにビジネスを展開していくさまは、まさに

旧来の枠組みでは捉えがたい新たな「地域」ネットワークや、それに伴うアイデンティティの変動が見受けられる。であるがゆえに、報告内では時間の都合により触れられなかった論点、「中古品貿易業の構造的問題」も極めて興味深い論点であると思う。業界特性およびそれゆえの「インフォーマルセクター化」へと繋がり、さらにSDGsの掛け声とともにむしろ市場ごと大資本へと回収されていく様は、例えばアナーニャ・ロイの「アーバン・インフォマリティー」の議論を彷彿させるものであるし、また第一報告で吉原氏が指摘した「上からのコモン・ゲイズ」とも表裏する事象であるとも捉えられよう。

3.2 フロアとの往還(2)

第二報告も第一報告同様、「在留資格の変遷過程」、「日本社会における在日外国人の形成するネットワークおよび社会関係資本の蓄積の影響」そして「そもそもの受け入れる社会における変化」など、様々な観点からの質疑応答、議論が展開された。先の報告で本論が注目した事項を重ね合わせながらここで取り上げたいのは、浅野慎一会員による「トランスナショナルな拠点形成」の先にある「地域」概念の捉え返しに関する質問である。日本という中継国において、ネットワークの重要性および地域との関係性にはどのようなものがあるのか。また越境的なロカールこそが地域である、という認識もあるなかで、自治体はどのような意義をもつのかといった問いに対し、福田氏はアフガニスタン人の子供たちが自分の出身地について表明する際に見受けられる多様なアイデンティティについて返答し、まさに「トランスローカル」な状況を指摘した。報告冒頭での福田氏による問題関心と直接的につながるかたちで、難民的要素が多いので帰ることのできる場所のない、そして日本に住み続けられる／ビジネスを継続できることを求めるニューカマーたちの、永住意志の捉え方の難しさについて触れられたのも、「地域」という枠組みの更新必要性やその多義性に対する示唆となったように思う。

4. 若干の考察

以上、心許無くはあるが当日の議論を、それぞれの論点に沿いながら可能な限り記してきた。以降は蛇足ではあるが、以上の議論をとおした筆者による若干の考察を書き添えたい。

さて、UCLAに籍を置いたアラン・スコットとマイケル・ストーパーの2人が手がけた論文(2015, 2016)以降、まさに現在の「都市」を把握するための理論的論争が繰り広げられてきた。様々な都市の事例を捉えうる統合理論の開拓を望み、またその構築を提唱したスコットとストーパーは、昨今隆盛を見せる都市理論の3つの潮流——プラネタリー・アーバンニゼーション理論、ポストコロニアル都市理論、アセンブリッジ／ANT的都市理論——に対し、舌鋒鋭く批判をおこなった。これ以降、その批判対象であるニール・ブレナーやアナーニャ・ロイによる再批判なども加わり、まさに「都市の理論とは何か」が世界的に問い直されている状況は、COVID-19パンデミックが招いたロックダウン＝都市封鎖の状況を経て、今もなお続いている様に見える(e.g. 平田・仙波 2021)。

吉原氏の報告とそこから生じた議論は、まさに地域・都市をめぐる理論的境界とその超克に向けた示唆を与えてくれるものであった。その理論的含意は、本人も言及されていたように、上記でいうところのアセンブリッジ／ANT的都市理論に共鳴するところもみられた。この理論は、さまざまな構造の関係性——遠／近、社会／物質のつながり——を記述する試みとして「集合 *assemblage*」を捉え、結果としての都市に焦点を当てるのではなく、その創発と過程、そして複数の時間性・可能性へと強い関心を寄せている(McFarlane 2011:206)。

吉原氏がモビリティーズの複数形に焦点を当てたように、このアプローチもそれと同様の視点を有している。イグナシオ・フェリアスによれば「複数形の都市の集合」という概念は、1つの適切な概念的ツールをもたらすものであり、それによって都市を復元的対象と

して把握すること、いわば都市という複数の実演という感覚を得ることができる(Farias 2009:14)。」ここにおいて、都市は、一つの複合的対象 a multiple objectとして認識すべきものとなる。

紙幅の都合上、このアプローチの詳細な射程と含意をここで検証することはできないが、他にスコットとストーパーの取り上げたプラネタリー・アーバンゼーション論であれポストコロニアル都市理論であれ、これらはいわば既存の都市理論に対する異議申し立てとしての側面を強く打ち出しているのは間違いない。ナイジェル・スリフトやドリーン・マッシーの仕事に代表される非表象理論および「関係的思考」、そして「関係論的転回」について詳細にレビューした林の論考を参照すれば、都市研究において支配的な理論に対する「反理論としての理論」(林 2021:290)が求められているのだ。統合理論と反一理論が「二重の運動」(カール・ポランニー)のように理論的布置の上でせめぎ合うことにより、こうして理論と対象をめぐるその枠組み自体が問い直されている状況は、本国の地域社会学にとっても注目に値するだろう。

まさにこのような論点は、福田氏の報告・討論でも見られた設定される対象それ自体——地域、コミュニティそしてフィールド——の揺らぎ、また旧来の対象設定を(フェティシズムとして)棄却する必要性に関する議論にもつながりうる。いかにその理論的源泉を有していたとしても、19世紀中葉のフリードリヒ・エンゲルスが見たマンチェスターが生じさせた「これが都市／地域なのか」といった問いは、現在のそれと完全に合一するものではない。筆者は戦前戦後を貫いた射程から広島を舞台に進展した〈平和都市〉化のダイナミズムを明らかにする研究を行ってきたが、むしろ「ここが都市である」とされていく「過程」自体に、都市を照射しうる力学のようなものを見てきた(仙波 2023)。いわば論文における冒頭の語句定義それ自体に付着する、無数のポリティクスの様相を丹念に紐解いていく必要性をここから痛感するに至った。トランスナショナルなネットワークそれ自体が新たな「コミュニティ」を創出し、後者が前者をさらに強固にするといった現状を前に、「問い」それ自体を「問い直す」必要があることが二つの報告より明確化されたように思えてならない。

文献

Fariás, Ignacio, 2009, "Introduction: decentering the object of urban studies," Ignacio Fariás and Thomas Bender eds., *Urban Assemblages: How Actor-Network Theory Changes Urban Studies*, Routledge, 1-24.

林凌2021, 「出来事としての都市を考えるために——都市研究における「関係的思考」の理論的系譜とその問題点」平田周・仙波希望編著『惑星都市理論』以文社, 277-305.

平田周・仙波希望編著, 2021, 『惑星都市理論』以文社.

McFarlane, Colin, 2011, "Assemblage and critical urban theory," *City* 15: 204-224.

Scott, Allen J, and Micheal Storper, 2015, "The Nature of Cities: The Scope and Limits of Urban Theory," *International Journal of Urban and Regional Research*, 39(1): 1-15.

Scott, Allen J, and Micheal Storper, 2016, "Current debates in urban theory: A critical assessment," *Urban Studies*, 53(6): 1114-1136.

仙波希望, 2023, 『ありふれた〈平和都市〉の解体——広島をめぐる空間論的探求(仮)』以文社, 近刊.

Urry, John, 2007, *Mobilities, Polity*. (=2015, 吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ——移動の社会学』作品社.)

- 吉原直樹, 1994, 『都市空間の社会理論——ニュー・アーバン・ソシオロジーの射程』 東京大学出版会.
- , 2011, 『コミュニティ・スタディーズ』 作品社.
- , 2022, 『モビリティーズ・スタディーズ——体系的理解のために』 ミネルヴァ書房.

「モビリティ論」をいかに学ぶか、いかに活かすか

藤本 延啓

1. はじめに

本稿は、2023 年 2 月 18 日に立教大学で開催された「地域社会学会第 4 回研究例会」に対する批評論文である。本研究会は、研究会冒頭で清水研究委員長から確認があったように、「モビリティ的転回」が地域社会学に対して持つ意義を問いながら、「モビリティ論」について理解を深めることを目的として、吉原直樹会員による「創発／節合の機制—くコモン>を再考する—」と、福田友子会員による「南アジア系移民企業家の地域拠点形成：千葉県内の中古車・中古部品貿易業者を中心に」の、報告 2 本をもって構成されている。本稿では、この研究会の内容を振り返りながら、筆者なりの考察を試みていきたい。

2. 第 1 報告

2.1 吉原報告の概要

2.1.1 報告のねらいと思想史

まず、本報告の「ねらい」として「地域社会学にとって移動論的転回のもつ意義について」「モビリティーズの射程とその基底をなす概念—複雑性思考／創発／節合など—to言及しながら考察する」ことが提示された上で、「移動論的転回」に至る思想史の解説があった。

1950 年代から 60 年代に「実証主義地理学」が、1970 年代になって「人文主義地理学」が台頭した。ここでの焦点は「場所」「場所の意味」であり、それはその後、ルフェーブル『空間の生産』が契機となって「空間論的転回」へつながり、「文化論的転回」と連動したという。吉原会員は、これらに共通に意識されるのは「モダニティの両義性」であるとし、重視されたのは「空間／場所と時間をどのように捉え返していくか」ということであって、その先の流れとして「移動論的転回」に至ったという。

吉原会員は、このような経緯を持つ「移動論的転回」の「照準」として、「社会の再領域化／再場所化」を挙げ、それらは「非線形的理論」「複雑性思考」を「定礎」とするとし、『モビリティーズ』（Urry 2007）に依拠しながら『境界』＝『あいだ』に着目する。すなわち、『境界』＝『あいだ』は「通過点」ではなく、アモルフ（不定形）な「社会的諸関係」「関係態」「関係様式」のありようであり、そこから「創発」が現れてくるものとした。

2.1.2 様々な関連概念

吉原会員は、「創発」につながる様々な概念—デランダによる「アサンブラージュ」、ギブソンによる「アフォーダンス」、ラトゥールによる「アクターネットワーク」、そして「節合」—を紹介し、これらの概念は、「複雑性」「非線形」の議論につながり、「創発」の起点をなすものとした。さらに、関連する概念として、デランダによる「はかない集合体」、

似田貝香門による「コ・プレゼンス」、アーレントによる「網の目」を紹介し、これらも「複雑性」「非線形」の議論につながると整理した。

2.1.3 「コモン」

吉原会員は「このように考えてくると、ひとつの眼目として浮かび上がってくるのが『コモン』だ」とし、さらに「その『コモン』の現在性をどう捉えるのかということに、『創発』『節合』が密接にかかわってくる」と述べた。

その文脈で、吉原会員による『アセンブリ』（Negri and Hardt 2017）からの発想という「上からのコモン・ゲイズ」が提示された上で、それを問題視しながら、東日本大震災の被災地としての福島県大熊町における「サロン」を対象とした事例分析が紹介された。すなわち、「『サロン』には創発や節合の原構造としての『コモン』を見いだすことができた」が、しかし「それは『絆補助金制度』つまりは『上からのコモン・ゲイズ』によって形骸化されていった」といった分析である。

2.1.4 まとめ

最後に吉原会員は、『上からのコモン・ゲイズ』の浸透によって「創発」「節合」の機制がどうなっていくのか』『はかない集合体』が現実のものになるのか」と、今後の地域社会に対する観点を提示しながら、「モビリティーズの非線形的な動態に立ち戻って、人びとが『語り合い』『聞き合い』『ふれ合い』を通して、『相互に関係をもつ』ことの意味を検討してみる必要がある」と指摘して、報告を終えた。

2.2 質疑応答から

2.2.1 フロアからの質問

各会員による質問から、ここでは以下の5点について取り上げる。

①浅野会員による、吉原報告にあった各概念（節合・アフォーダンス・アサンブラージュ等）の歴史的な規定を問う質問。吉原報告にあった「従来とは違って」という言葉をひきながら、その「従来」とは何であるのか、また、それ以後の各概念をどのように定義できるのか、と問うた。加えて、「ポスト・コロニアリズム」を歴史上のメルクマールとしながら、「コモン・ゲイズの浸透」への対抗において、「ポスト・コロニアリズム」の視点を抜きにして議論するのは難しいのではないかと述べた。

②徳田会員による、吉原会員における「モビリティー」「モビリティーズ」といった言葉の使い方に対する質問。様々な論者が様々な文脈で「モビリティ」を使っている現状を挙げながら、それが「ブラックボックス化している」と指摘した上で、吉原会員が「モビリティ」とカタカナで表記する意図、および訳書タイトルを『モビリティーズ』と複数形とした意図を質問した。

③阪口会員による、「地域社会学においてモビリティ論を議論する意義はどこにあるのか」との問い。

④小山会員による、吉原会員が紹介した各概念を実証研究において表現しようとする、「個別の事例ごと」のような捉え方しかできないとする趣旨からの、モビリティ論の議論と実証研究との関連に関するコメント。

⑤清水研究委員長による、吉原報告にあった「サロン」のどのあたりが「節合」「非線形」「複雑性」なのか、事例分析における吉原会員の見解を問う質問。

2.2.2 吉原会員による応答

①に対して

各概念について「いずれも複雑性の議論である」としながら、その共通点を「近代の両義性をどう見ていくのかということ」だと述べた。さらに「近代の両義性の中にコロニアリズムが入ってくる」として、コロニアリズムを「線形理論である」としながら、そのような「線形的理論を複雑性の議論で捉え返していくこと」に意義があるとした。

②に対して

前者については、以前から言われている「移動研究」と差異化する目的である旨、後者については、社会システムとして「移動」を見る場合に、「モビリティ」（単数）ではなく、「モビリティーズ」（複数）として押さえるべきではないかと考えた旨、説明があった。

③に対して

地域社会学における現状について「もう一回『人が共にある』ということに立ち返って見ていく必要がある」と「コモン」の文脈を提示し、さらに「(地域社会学において) どういう集合性や関係性ができてくるのか、ということが十分に議論されてきたのか」と疑問を呈した。さらに、本報告で吉原会員が示した複数学問領域に共通の諸概念（創発・節合・アサンブラージュ等）を介して、地域社会学と他の学問領域で「議論を重ね合わせることに」の重要性を主張した。

このような吉原会員の見解に応じて、阪口会員は、「空間フェティシズムの相対化」「認識論と経験的研究のねじれ・分離をいかに乗り越えるか」といった、地域社会学における課題を具体的に指摘した。

④に対して

ここでの諸概念について、「対象に即して、概念自体が変わっていく、発展していく可能性がある」一方で「逆に言うと、ある方向に導いていくということは、決してない」とした。さらに、これら諸概念がおしなべて「脱構築」を前提としていることを挙げて、「だから、どこに行くかわからないような、そういった不安定性とかいったものはあるかなと思う」と答えた。

⑤に対して

「旧来のコミュニティ」と比較しての「サロン」の特徴として「『サロン』は元の自治会や行政区とは無関係に人が集まっている。そこに外部のボランティアが入ってきている」と述べ、「大事なことは、そういうもの(サロンにおける相互行為)を通して、自己の立ち位置を見つけていくこと」だとした。その上で、「大熊町が『サロン』を広げていく過程で変質していく。それが『良くない』とか『良い』とかではなく、『まなざし』として進んでいることをどう考えるか」「『上からのコモン・ゲイズ』『公の絡め取り』をどのように捉え返していくか」と、事例分析における観点を提示した。

3. 第2 報告

3.1 福田報告の概要

3.1.1 福田会員の研究史と問い

福田会員が研究を始めた 1990 年代において、外国人研究は「定住」がキーワードになっていたという。それは、「『定住』をするか否か」といった問いを前提としながら、「世代」「定住年数」で比較するスタイルであり、福田会員はそのような研究のあり方に違和感を覚えていたが、2000 年代に日本でトランスナショナルリズム論の導入があったことから、移民のありようを「トランスナショナルな拠点形成」と位置づけることで、その違和感はある程度解消されたという。

このような研究の展開の中で、福田会員における現在の問いは、「移民はなぜ地域に集住／分散するのか」「移民はどのようにして地域に拠点を形成するのか」の 2 点であり、今回の報告は後者に基づいて行うことが示された。

3.1.2 千葉県における外国人の傾向と中古車・中古部品貿易

報告の前提として、①千葉県における外国人の傾向と②中古車・中古部品貿易の概要について紹介がなされた。

①千葉県の外国人数は全国 6 位であり、外国人比率は 2.66% で全国平均 (2.29%) よりやや高いこと。国別割合は全国的な傾向と同様だが、在留資格で見ると「経営管理」「家族滞在」が多く、特別永住者 (在日コリアン) が少ない傾向にあること、人口の推移においてはスリランカ・パキスタン・アフガニスタンが特徴的な動きをしていること、などが紹介された。

②中古車・中古部品貿易については、それが独特なグローバル市場—いくつかの国際的な拠点を介した輸出・再輸出システム—を形成していることが示された。

3.1.3 トランスナショナルな拠点形成

続いて、本報告での鍵概念である「トランスナショナルな拠点形成」について説明がなされた。中古車・中古部品貿易の特徴を受けて、移民企業家も、出生 (出身) 国・中継国・第三国・最終目的国といった複数の拠点到家族や友人といった旧知の人びとを配置して、「それぞれが各拠点でビジネスを同時に展開しながらも、全てネットワークの中で動いていく」という形式のビジネスモデルが構築されていることについて、「間接移民システムモデル」(Barrett 1976) の修正モデル図を示しながら紹介した。

3.1.4 なぜその地域なのか

続いて、「千葉における中古車・中古部品市場の形成史に着目する必要がある」と指摘した上で、千葉県における中古部品貿易業者 (千葉県警による呼び名として「ヤード」) の状況について紹介した。

千葉県全体として、「成田空港から近い」という地理的条件を背景にしながら、南アジア系の業者が多い中で、県内でも地域的な偏りがある、印旛地域にはアフガニスタン人が多く、山武地域はスリランカ人が多い、東葛地域はパキスタン人が多いといった傾向がある。さらに、印旛地域内の四街道市と佐倉市にアフガニスタン人が多い背景として、2010 年代の UAE におけるシリア派排除の政治的動きがあったことや、山武市にスリランカ人

が多い背景として、山武市行政による認識としては「東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンになったこと」だというのが、福田会員は「イスラームのモスクが山武市にあったこと」が理由ではないかと考えていることなどが紹介された。

3.1.5 地域の連続性

事業者が多いエリアについて、ひとつひとつの「市」としてとらえるよりは、連続的な地域として捉える方が実情に合っているという。具体例として、山武地域における、アフガニスタン人が多く入ったエリアから東側に派生していく「連続性」が紹介された。

さらに、外国人人口統計を示しながら、「山武市ではスリランカ人がダントツ 1 位を継続。千葉県内で見るとスリランカ人人口は山武市は 3 番目だが、これも印旛地域と山武地域の連続的な中で 3 位を占めている」とする見解を述べた。

3.1.6 まとめ

最後に福田会員は、「スリランカ人であればスリランカと山武市、アフガニスタン人であれば UAE やアフガニスタンと四街道市、みたいな感じで、複数拠点を同時並行で維持する。各拠点を転々とする。ビジネスを担う成人男性もその家族も、移動し続ける。そういう形態の『居住』になっている。そういう現象が地域社会学にとって議論の対象になるのではないかと考えて紹介した」と、締めくくった。

3.2 質疑応答から

3.2.1 フロアからの質問

各会員による質問から、以下の 3 点について取り上げる。

①トランスナショナルな拠点形成と「地域」との関係についてどのように考えるか。ネットワーク自体が「地域」なのだという捉え方ができるのではないかと、とする質問。

②どういう経路で難民申請からビジネス系の在留資格にたどり着くのか、とする質問。

③「事業の場」と「生活の場」で分けて考えるべきなのではないかと、とする質問。

3.2.2 福田会員による応答

①に対して

実際の出生地と本人の認識における「出身地」のズレや家庭内言語と得意な言語のズレに見られる“不思議なアイデンティティ形成”から説き起こして、「トランスローカリティ」に言及し、「そういうものを一緒に結び合わせた『地域』があると想定している」と述べた。

さらに、永住意思を問うアンケート結果をひきながら、「スリランカ人やアフガニスタン人は『住み続けたい』と答える。難民的な要素が強い人たちなので帰るべき場所がない」「住民登録は山武市だが、実際働いているのは茨城県や埼玉県というケースもある」と紹介しながら、「そういうものもひっくるめての『トランスローカリティ』かなと思う」と述べた。

②に対して

「難民性の高さと経済力は一致しない。難民性は高くてもビジネスは安定的に UAE やスリランカでしてきた人たちにとってみれば、ビジネスでの実績が在留資格を取るための

根拠になる。こういった人たちが難民申請から始まる人たちとは限らない」としながら、「難民申請から始まるものも一定数ある。そういう人たちが、難民申請からビジネス系の在留資格にチェンジしていくのは説明しにくいところ」と述べた。

③に対して

「ヤードが設置されるような場所（事業の場）と住宅が整っている場所（生活の場）は異なっている」が、とはいえ『印旛地域は印旛地域、山武地域は山武地域』という感じなので、特にそれ（「事業の場」と「生活の場」）を区別して説明しなかった」と述べた。

4. まとめと考察

筆者にとって、2本の報告はそれぞれに強く興味をひかれる内容であった。まず、福田会員による第2報告は、筆者がこれまで続けてきた廃棄物研究にカテゴリとしては同じくするものであるものの、なじみが薄い研究対象や知識と、なじみのある展開（例えば廃棄物がらみの“言いづらい事実”）が同居する、心地よく興味関心を刺激される報告として楽しく聞かせていただいた。紙幅の関係から本稿では大きく割愛させていただいたが、福田会員の粘り強いフィールドワークに裏打ちされた、非常に興味深い情報にあふれた報告だった。その一方で、吉原会員による第1報告は、正直に申し上げれば、報告を聞いた段階では大半を理解できなかった。報告資料やメモを何度も読み返し、関連文献をかき集める中で、自らの不勉強にゲンナリしつつも、“知らないことを知る”ワクワクした気持ちが湧き上がってくることを同時に感じていた。このような事情から、以後は第1報告に関する内容中心の記述となっていることをお許しいただきたい。

研究会のおわりに、清水研究委員長から、「吉原報告は『移動論的転回が持つ地域社会学への含意』というところで勉強ができた。特にミクロな場面での節合、人びとが出会う、その『共にある』場所、シーンというか場面というか、そういうところに着目するという視点だった」「福田報告は、大きな、グローバルなモノ・ヒト・カネの循環と地域社会との関係を見てきたかなと思う」「いずれにしても、ミクロから、またマクロからの脱領域化、別の形の再領域化という、そこに考えるヒントをいただいた、視点をいただいたと思う」という整理があったが、筆者としては、清水研究委員長の指摘に加えて、「抽象から具体、また具体から抽象と行き来する議論へのヒント、視点をいただいた」と実感した。

例えば、吉原報告において繰り返し述べられていた「線形的な見方を非線形・複雑性の議論で捉え返す」といった抽象的な示唆は、福田報告にあった中古車・中古部品貿易業者の「居住」に関する具体的な情報について、「制度・行政による線形的な対応と現実の状況における非線形・複雑性とのせめぎ合い」という視点を与えてくれる。これは、浅野会員が「国民主権や民族解放を前提として市民社会が成熟していく。そういう、ある意味では線形的な社会のあり方の変化、それ自体が、人間に不幸をもたらしている」「国民主権や民族自決、それに基づく市民社会っていう、そういう社会の成熟のしかた自体を根本から疑う。そういうような要素は、考え方によっては非線形的な要素を含んでいる」という指摘にもつながる、社会に対する理解の根本にかかわる部分である。

一方で、浅野会員が吉原報告における各概念の歴史的な規定について問い、また徳田会員が「ブラックボックス化している」と指摘したとおり、「モビリティ論」で用いられる各概念の場面場面上的な意味合いが極めて難解だった。これはもちろん、筆者の勉強不足

によるものであることに弁解の余地はないのではあるが、もしこのような難解さを筆者以外の研究者も感じていたとしたら、「モビリティ論」を抽象論に閉じ込めてしまうことにつながったり、実践論に活かそうとする際に本質的な議論を単純化したり、解釈の切り取りによる“あてはめ”へと矮小化してしまったりするのではないかという危惧は、筆者の浅学ゆえの杞憂だろうか。

そもそも、現実社会に対して「複雑性」「非線形的」な捉え方が重要である（そうせざるを得ない）ことは、多くのフィールドワーカーが現場で常に実感し続けてきたことであるから、観点としての「複雑性」「非線形的」は取り立てて目新しいことではないと考える。現場・生活に接する研究を続けてきた筆者としては、（阪口会員や小山会員による質問に類することであるが）「複雑性」「非線形的」な考察を（抽象論に留めずに）実践的な分析・研究に活かす方策の具体化が、「モビリティ論」に関わる議論に期待したいところであるし、その可能性を強く感じるところでもある。

実践的な分析・研究ということについては、吉原会員の報告・著作にもそれを見ることができが、例えば被災地における自治会に対して、「あるけど、なかった」「国策自治会」と呼ぶようなもの」（吉原 2014：38 など）とする吉原会員の見解には、（特に、緻密な調査・参与観察を積み重ね、現場の多様な状況を理解している研究者であるほど）抵抗を感じる向きもあるかもしれない。しかし、吉原会員による分析はすぐれて典型的・理念的であり、それをモデルとして受け止めることに意義を見出すことができるものと、筆者としては考える。吉原会員による「創発性＝『創発的なもの』、そしてそこを通底する「節合」の機制を視野に入れるなら、定住主義が万全でないことが容易に理解できるであろう」（吉原 2014：44）とする指摘のように、「移動」にかかわる前提に疑問を差し挟んでいく視点・方法あたりから、モビリティ論に関わる抽象的議論と実践的議論の架橋としていきたい。さらに、今回の報告で吉原会員は、学問領域間での共通の諸概念を介した「議論を重ね合わせること」の重要性を指摘したが、このあたりに「いかに実践的な分析・研究に活かせるか」へのポイントのひとつがあるように思う。

今回の研究会の後、九州のある山村で「地域おこし」の隆盛と衰退にかかわるフィールドを歩きながら、また研究室でお蔵入りしている過去の調査資料どもを眺めながら、吉原会員から学んだ「モビリティ論」を何度も思い起こした。その中で、新たな考察の展開の糸口がチラリチラリと見えたような気がした。…勉強不足を痛感するばかりではあるが、今回の研究会を通して、筆者が研究上で感じている矛盾や漠然とした不安の、その先にあるひとつの光を見たようにも思えた次第である。

【引用文献】

Barrett, F. A., 1976, “A Schema for Indirect International Migration”, *International Migration Review*, 10(1): 3-11.

Negri, A. and Hardt, M., 2017, *Assembly*: Oxford University Press. (2022, 水嶋一憲・佐藤嘉幸・箱田徹・飯村祥之訳『アセンブリ——新たな民主主義の編成』岩波書店)

Urry, John, 2007, *Mobilities, Polity*. (2015, 吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ』作品社)

———, 2016, *What is the future?*, Polity Press. (吉原直樹・高橋雅也・大塚彩美訳,

2019, 『「未来像」の未来——未来の予測と創造の社会学』 作品社)

吉原直樹, 2014, 「自治会・サロン・コミュニティ——「新しい近隣」の発見」『社会学年報』 43(0): 35-47.

Sustainability and City-Regions の研究動向紹介

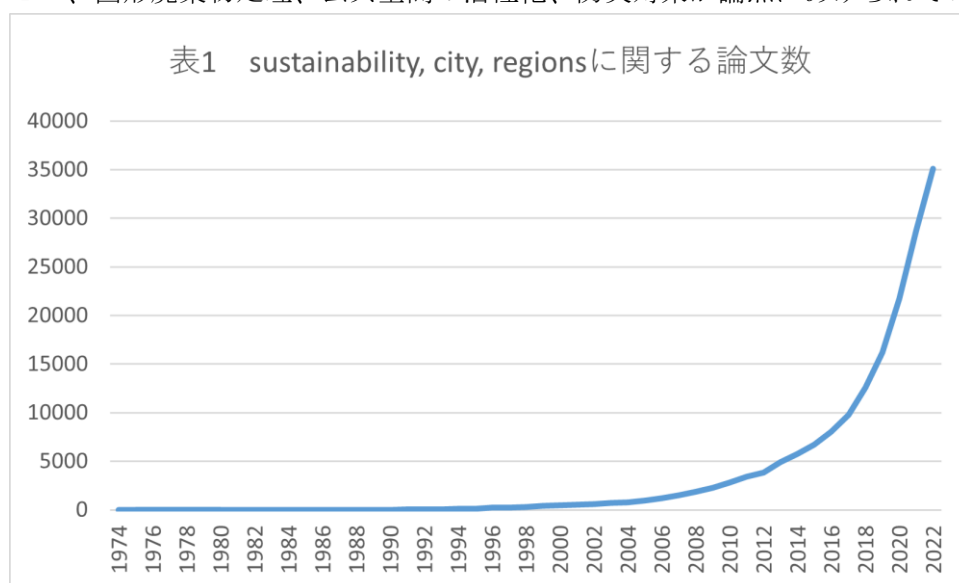
鈴木 鉄忠

Sustainability と都市・地域研究

今号より本コーナーでは研究動向紹介も折々に混ぜることにした。今回は「Sustainability and City-Regions (持続可能性と都市・地域)」をテーマとした英語論文の研究動向を紹介したい。

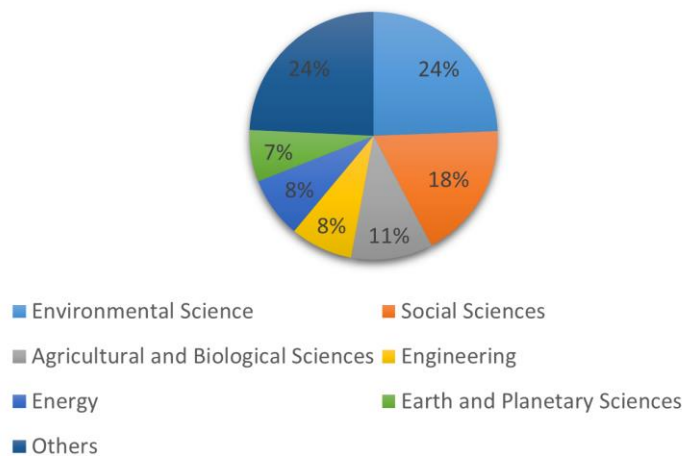
Sustainability の用語に初めて出会ったのは、ロバート・N・ベラーの『善い社会』(中村圭志訳、みすず書房、2000年)だった。大学院ゼミで輪読したのだが、テキストの中では「どの生態系の『収容力 carrying capacity』にも限界があり、それに対する配慮がなければならないという認識がある」という文脈で用いられていた(同書、13頁)。ベラーの念頭には、1970年代以降に米国社会で広まった環境意識の高まりとエコロジー運動の展開があった。原書が1991年刊行なので、すでに1990年代頃には sustainability という用語が人文・社会科学の分野に登場し始めていたことがうかがえる。

周知のように現在、sustainability という語彙が大流行している。その背景にSDGs(持続可能な開発目標)のブームがあることは想像に難くない。GDSsの目標11が「住み続けられるまちづくり」である。ここで都市は、経済成長のエンジン(世界のGDPの8割が都市で産出)であると同時に、地球環境破壊の主要因(世界の温室効果ガスの7割以上が都市で排出)とされる。よって都市問題に対処しながら、いかに経済成長の活力を維持し、都市生活の質を向上させられるかが、ここでの sustainability の意味するところだろう。なお最新の国連レポート(2022年度版)では、スラムと貧困対策、大気汚染、公共交通アクセス、固形廃棄物処理、公共空間の活性化、防災対策が論点にあげられている。



では学術分野ではどうか。査読済み英語文献の世界最大データベース「Scopus」にて、sustainability を全分野に、city もしくは regions を題目・抄録・キーワードに含む論文を検索した。表 1 が示す通り、論文数は指数対数的に増加しており、1974 年にわずか 1 本だったが 2022 年には 3 万 5 千本余りに達する。表 2 の研究分野別にみると、1974-2022 年の間に刊行された約 17 万本に及ぶ全分野の論文の中では、Environment Science の 24% を筆頭に自然科学系の比率が全体として多く、Social Sciences 分野はシェア第 2 位の 18% を占めることがわかる。

表2 研究分野別のSUSTAINABILITY論文シェア



次に都市地域研究ではどうだろうか。前々号の No.8 で中澤・齊藤会員が紹介した中から英文ジャーナル 3 誌—*Urban Studies*, *International Journal of Urban and Regional Research* (IJURR), *Regional Studies*—を選んで探った。sustainable を題目・抄録・キーワードに含む論文は、表 3 に示す通り、2000 年代の後半以降に徐々に増加し、2010 年以降は各誌で継続的に掲載されていることがわかる。

表3 sustainableに関する都市地域研究の論文数(英文3誌)

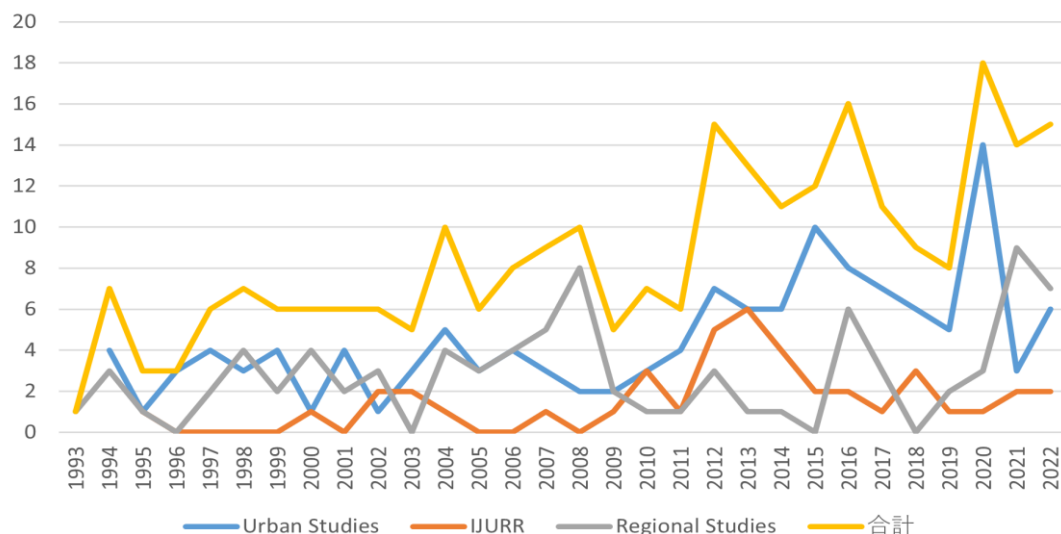


表4 都市地域研究の分野でインパクトの高い英語論文（1992-2022）					
No.	雑誌名	題目	出版年	巻(号)	被引用数 FWCI
1	IJURR	Give Me a Laboratory and I Will Lower Your Carbon Footprint!' - Urban Laboratories and the Governance of Low-Carbon Futures	2014	38(2)	206 10.93
2	IJURR	Cultural districts, property rights and sustainable economic growth	2002	26(1)	192 3.77
3	IJURR	Urban development under ambiguous property rights: A case of China's transition economy	2002	26(1)	144 4.15
4	Urban Studies	Gentrification and social mixing: Towards an inclusive urban renaissance?	2008	45(12)	539 10.75
5	Urban Studies	Three challenges for the compact city as a sustainable urban form: Household consumption of energy and transport in eight residential areas in the Greater Oslo Region	2005	42(12)	358 1.91
6	Urban Studies	Disentangling area effects: Evidence from deprived and non-deprived neighbourhoods	2001	38(12)	340 6.06
7	Regional Studies	Environmental Innovation and Sustainability Transitions in Regional Studies	2012	46(1)	380 20.31
8	Regional Studies	What kind of local and regional development and for whom?	2007	41(9)	271 9.83
9	Regional Studies	Industrial symbiosis in Puerto Rico: Environmentally related agglomeration economies	2008	42(10)	171 6.7

なかでもインパクトの高い論文を表4にまとめた。被引用数とFWCI（Field-Weighted Citation Impact—当該文献の被引用数と類似の文献の平均被引用数との比率で、出版年＋3年間が対象。1.0を上回ると平均より多い引用があることを示す値）の高い上位3本の論文である。ここでsustainableとcity-regionsはどのような意味で用いられているかをインパクトの高かった3つの論文から探してみよう

IJURR掲載の論文1は、もっともSDGsに適合したテーマ、つまり環境保護と経済成長の両立という意味でsustainableを用いている。低炭素アーバン・ラボラトリーという実験的試みに取り組んでいるイギリス・マンチェスターが事例である。行政・民間・大学の産官学連携事業であることにも注目している。地方都市における環境保護と経済成長に公民連携の新たな社会実装がどのような効果をあげているかを検証する、という問題設定は日本でも十分に可能だと思われる。

次にUrban Studies掲載の論文4は、地域社会学会でもしばしば議論されるジェントリフィケーションが主題である。ジェントリフィケーションを肯定的な方法として都市政策に取り入れる例が欧米を中心に増えている現状に対して、それは開かれた都市や社会混合につながるのか、実際は分断やゲートドコミュニティの増殖をもたらすのではないか、という主張を展開する。議論自体は興味深いが、sustainableへの言及は抄録に登場する程度である。特に特別な意味では用いられていない。

Regional Studies掲載の論文7は、今回のサーベイでもっともインパクト指標の高かったものである。太陽光発電のような環境保護の技術革新と地域研究（主に産業立地論や経済地理学）との新たな関連付けを試みており、野心的で視野の広い論文である。ここでsustainabilityは議論の大前提に据えられている。Sustainableな技術や商品の開発にむけた産業転換とそれに伴う社会転換は不可避なのだから、持続可能性への移行sustainability transitionsに関連する新たな地理・地域研究の全容を描き出そうとする。具体的な都市や地域というより、sustainabilityに関する地理・経済社会研究の交通整理に重点があり、コミュニティや地域組織への言及がないため、本学会ではあまりみられない問題設定である。

以上の3論文だけを見ても、sustainableの使い方は様々あることがわかる。被説明変数で使われる場合があれば（論文1）、逆に説明変数のように用いられる場合（論文7）

もあり、または慣用句として用いられる場合（論文 4）もある。city や region は事例対象として（論文 1 や論文 4）、あるいは研究視点として（論文 7）用いられる。

都市・地域研究のなかの sustainability

では都市・地域研究のなかで sustainability に関連させた研究はどのようなものがあるか。とりわけ地域社会学が対象とする地方都市や小中規模の都市地域と sustainability はどう関連づけられているだろうか。ここでは Mayer and Knox (2010) の論文「小規模な町の持続可能性—第 2 の近代における展望」を取り上げてみたい (Mayer, Heike and Knox, Paul L, 2010, “Small-Town Sustainability: Prospects in the Second Modernity,” *European Planning Studies*, 18(10): 1545-1565.)。この論文は、地域社会学会でいえば「ローカルの再審」に似た問題設定を採用している。ローカルはグローバル化の影響に対する無力な犠牲者ではなく、暮らしやすさや生活の質の向上を目指した様々な実践や創意工夫を展開している、という視点である。

Mayer and Knox は小さな町の持続可能性という主題をベックの「第 2 の近代」に位置づける。第 1 の近代が作り出した区別—自然/社会、知識のある/なし、組織/市場、戦争/平和、国民国家の内側/外側など—の境界線があいまいになる第 2 の近代では、「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」の原理が重要になる。なぜなら「あれかこれか」の発想では温暖化やエネルギー問題や金融危機といった地球規模の根本問題に対処できないため、諸制度は既存の垣根を越えた重層的なネットワークを構築しなければならないからである。そこで人々の間に新たな 4 つの感性が生まれてきており、それらが小さな町で sustainability を目指す国際ネットワーク運動が誕生するカギになっている、と主張する (ibid, pp.1549)。

以下に述べる 4 つの感性は、sustainability と小規模の町を関連付ける重要な点であり、地域社会学会の議論にも示唆的である。

一つめは、「食、オーガニック、スロー food, organic, slow」である。「食べる」という日々の意識的な選択は、取るに足らない現象では決してなく、個人化とライフポリティックスの一部である。それと同時に、加速化するグローバル社会への抵抗であり、応答である。事例として、食と味覚の均質化に抗するイタリアの小都市発祥のスローフード運動と、それらの含意を都市政策に組み込んだチッタスロー（スローシティ）運動が取り上げられる。後者の運動に対しては「経済成長を否定する非現実的なまちづくり」「中世のまちに戻れという懐古主義的なまちづくり」という誤解が少なくないが、まちの伝統と革新を「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」で意識的に取り入れた運動である、と主張する (ibid, pp.1555)。これが第 2 の近代の感性といえる根拠だろう。実際に日本でチッタスロー運動の認証を受けている前橋市は、ICT を活用したスーパーシティとスローシティの両立を目指している。

二つめは、「環境保護主義 environmentalism」である。第 1 の近代が作りだしたリスクに対して、3 つの E (Environment, Economy, Equity) が小規模都市の sustainability の新たな規範に据えられる。事例として、環境先進国のスウェーデンで 71 つ（当時）の小規模自治体からなるネットワーク型の環境保護運動があげられる。「エコシティ（環境自治体）運動」では、「環境・経済・社会の目標を含みこんだシステム課題」として

sustainability が理解されている (ibid. pp.1556)。似た名称の取り組みが日本にも複数ある (環境モデル都市、エコタウン、環境未来都市、SDGs 未来都市など)。一つの大きな違いは、前者が「草の根の行動を通じた sustainability の達成」(ibid. pp.1558) であるのに対して、日本の場合は政府による選定と政策誘導が大きく介在する公定環境保護主義運動という点かもしれない。

三つめは、「起業家精神 entrepreneurship」である。第 1 の近代で地域開発の方程式だった工場誘致は、産業構造変化の著しい第 2 の近代では失敗リスクの高い選択になった。すると地元のスモールビジネス、起業、地域課題の解決を目指すソーシャルビジネスへの支援が「もう一つの経済空間」になりつつある。人口 4 万の米国の小さな町 Littleton の「エコノミック・ガーデン」という経済成長戦略は、起業とスモールビジネスの支援を通じて地域の「内と外 inside-out」から経済活性化を目指している。1989 年の事業開始から 15 年で町の仕事数は倍以上の 3 万 5 千に増加した、という (ibid. pp.1561)。日本でも過疎の町や村で空き家や施設をリノベーションしたカフェや農家レストラン、古民家宿、廃校を利用したグランピングサービス、自伐型林業といったスモールビジネスや起業が生まれている。企業誘致とは異なる地域経済空間創出をテーマとした海外の都市・地域との比較研究も興味深い。

四つめは、「創造性 creativity」である。ポスト工業社会において知識ベースの経済がますます主導権を握るようになり、クリエイティブなサービス産業が高い付加価値を生み出す。創造都市論などでなじみある議論だが、論文ではサンフランシスコではなく、アルバニアやマケドニアの小都市の創造都市事業が事例である。日本にも徳島県神山町のような事例があるので、ここでも海外の小都市地域との比較研究が可能と思われる。

以上、本稿の前半では Sustainability と city-regions に関する研究動向を概観し、後半では Mayer and Knox (2010) の論文から都市・地域研究のなかの sustainability の位置付けを検討した。第 2 の近代で生まれつつある 4 つの感性—食と場所へのこだわり、環境保護主義、起業家精神、創造性—は、グローバル化に直面する各都市・地域のなかで独自に組み直しがなされていると思われる。この独自の組み直しのプロセスのなかに、その都市・地域の共同性が流動的に表現されているのかもしれない。

新たな感性のひとつである食と場所へのこだわりに関して、「私たちの運動は、食卓の皿 plate と惑星地球 planet の強固な結びつきを認識することから始まっている」と、スローフード運動の創始者カルロ・ペトリーニは述べた ([Slow Food terminology - About us - Slow Food International](#))。お茶碗と地球を結びつける想像力は、些細な日常の選択と惑星規模の社会変動を結びつけようとしたアルベルト・メルッチの社会理論「惑星社会論 the planetary society」に近い (『プレイング・セルフ』)。昨今の sustainability ブームがやがて忘れられるかどうかは、まだわからない。だがもし、地球の存続と次世代の持続をかけた一所懸命の応答—ベラーが「生殖性 generatability の政治学」と名付けたもの—として、地域の小さな実践を私たちが想像し説明できるなら、sustainability は今後も都市・地域研究に新たな視点と知見を生み出すキーワードであり続けるだろう。

執筆者一覧

吉原 直樹（東北大学名誉教授）

仙波 希望（札幌大谷大学）

藤本 延啓（熊本学園大学）

鈴木 鉄忠（東洋大学）

Journal of JARCS No.10

The Program of 3rd Serial Research Meeting of Japan Association of Regional and Community Studies

Article

The Mechanism of Emergence / Articulation:
Re-Thinking the Commons

Naoki YOSHIHARA

Review and Comment

Questioning from the Perspective of Anti-theory, or Non-subject

Nozomu SEMBA

How to Learn and Apply “Mobility Theory”

Nobuhiro FUJIMOTO

Regional and Community Studies beyond Borders

Research Trends on Sustainability and City-Regions

Tetsutada SUZUKI